

国際取引における共通言語の特性

——貿易取引と国際英語——

亀 田 尚 己

はじめに

- I 言語からみた貿易取引の歴史
 - II 世界的通商言語としての英語
 - III 貿易における英語使用の実態
 - IV 国際英語の拡大と様々な英語
- おわりに

はじめに

ビジネスは言語がなければ成立しない。取引も経営も、ある目的を達成するために人と人との間で行われる協同作業であり、通常その協同作業は作業者がお互いに理解しあえる言語がなければ成立しない。制度、慣習、文化そして言語が各々異なる国や地域にまたがる国際ビジネスの場合にも同じことがいえるが、その際の「お互いに理解しあえる」言語の代表的なものが英語である。今日では、政治、経済、文化の国際舞台でコミュニケーションの用具として英語が広く用いられているのは周知の事実である。本稿では、特に貿易取引の歴史と現状に焦点を合わせ、今日世界で広く使用されている国際通商語としての英語とは、いったいどのような英語で、いつ、どこで、誰によって、なぜ、どのようにして今日のように世界的に広められていったのであろうかという問題を考えていく。さらには、国際取引における言語またコミュニケーションの重要性、商用共通言語とし

での英語が必要とされる理由や、そこで用いられる様々な英語の実際や問題点、またその将来性などにも触れていくことにする。

I 言語からみた貿易取引の歴史

取引が成立するための三要素は、取引の対象となるモノ、そのモノと交換されうるモノかカネ、そして交換の行為者であるヒトであるが、この三者がそろったとしても、そのヒトに「売りたい」「買いたい」という欲望とその意思がなければ取引は成立しない。次に、その「～したい」という意思を相手に伝える手段、すなわち言語（狼煙や身ぶり言語などのサイン・ランゲージを含む）がなければならない。その他、経済学的に言えば、モノとモノが交換されるためには交換の目的物の希少性と効用性がなければならないし、社会的にみれば交換行為は自由意志に基づくものでなければならない¹。しかし、それだけでモノとモノ（カネ）の交換である取引は成立するだろうか。取引が成立するためには、「意思を伝える手段であるその言語を交換の両当事者であるヒトがお互いに理解できる」ことが大前提となる。

この取引（モノとモノ・カネとの交換）は太古から行われていたものであるが、大規模な交換は紀元前4000年にはすでに始まっていたといわれる。その頃現在のデンマークあたりに大作業場があって、当時の「規格品」である火打ち石の石器を、今でいうノルウエーや北ヨーロッパへ輸出し、また紀元前2000年には、金塊や延べ板になったアイルランドの金は、ブルターニュ、バルト海沿岸諸国およびスペインから需要があったという²。このような異なる地域の間で行われる取引を一般的には貿易取引と

1 笹森四郎『貿易契約論』同文館出版、1966年、6ページ。

2 Lefranc, G. 《Historie du Commerce》, coll. 《Que sais-je》, No. 55, P.U.F. (6 /

呼んでいる。貿易取引は昔から海上ルートにおいてもっともよく発達してきたものであり、今日でも世界貿易の主流となっているが、フェニキア人がすでに紀元前にエジプトや東地中海で海上貿易を行っていたことが知られている。この世界最古の海商に活躍したフェニキアの後身は北アフリカのカルタゴであるが、当時の貿易には以下のようなものも存在した。

カルタゴの商人は、目的地に着くと、積荷をおろし、波打ち際にそれらを並べて船に帰り狼煙をあげる。土地の住民は煙りを見ると海岸へ来て、商品の代金として自己の価値基準で判断した量の黄金を置き、商品の並べてある場所から遠くへさがる。するとカルタゴ人は下船してそれを調べ、黄金の額が商品の価値に見合うとみれば黄金を取って立ち去る。釣り合ぬ時は再び乗船して待機していると、住民が寄ってきて黄金を追加しカルタゴ人が納得するまでこういうことを続ける。双方とも相手に不正な事は決して行わず、カルタゴ人は黄金の額が商品の価値に等しくなるまでは黄金に手を触れず、住民もカルタゴ人が黄金を取るまでは商品に手をつけなかったという⁴。

古代にあっては一部にはこのような「無言貿易」も存在したが、貿易取引が行われるところに必ず売手と買手が存在し、彼らが自分たちの意思を表し、意見を交わし、議論を重ねたであろうことは想像に難くない。そして、それは言語によってのみ可能であったのである。先の無言貿易の場合にも狼煙を上げたり、黄金を追加したりする行為はサイン・ランゲージ⁵によるコミュニケーションであって、サインによって各々の意志をあらわし

ed.), 1972. [町田 実・小野崎晶裕訳『三訂版商業の歴史』白水社, 1986年, 7-8ページ]。

3. 上坂西三『貿易慣習』東洋経済新報社, 1970年, 3-4ページ。

4. 加藤静雄『ギリシャ文明のあけぼの②』三修社, 1987年, 62ページ。

5. sign language, 広義には声を使わないで手や身ぶりによって伝達するさまざまな手段。手話, 身ぶり言語と訳される。狭義には、聾啞者のための手話のこと。『現代言語学辞典』成美堂, 1988年。

ている。⁶

さて、このようにお互いの言語が異なる地域あるいは文化圏に帰属するヒトどうしの取引はいったいどのようにして行われていたのでしょうか。現代においてもまったく同じことを観察することができるが、以下の4つの方法のうちの一つあるいは二つ以上を組み合わせられていたはずである。

1. お互いの言語を理解、運用できる通訳を使う
2. 自分の母語を取引の相手方に理解してもらう
3. 自分自ら取引の相手方が使う言語を理解する
4. 双方が理解できる第3国言語か混成語を使う

その言語であるが、いったい当時世界にはいくつの言語があり、そのうちいくつの言語がこうした異なる地域間の取引に用いられていたのかを示す資料は存在しない。しかし、調査が進んでいる現代では世界にはおよそ約3,000から7,000、あるいはそれ以上の言語が存在するといわれている。言語の数が確定されない理由には(1)世界には未だに調査が行き渡っていない地域があること、(2)何をもって1つの言語であると認定するかの基準がないことが挙げられる。⁷第3番目の理由としては、(3)「世界の言語の

6 「無言」とは「沈黙」と同じもの、あるいは沈黙を包摂するものであるかという問題が生じるかもしれない。沈黙することには積極的意味（反抗、抵抗、不服従や不満の意志表明だけでなく、「承諾」の意志表示など）があるが、この「無言貿易」の場合の無言にも積極的な意味を見出すことができるだろう。現代でも、貿易実務上、オファーの申込者に対し何も返事をしてこない場合に、「沈黙は承諾か」という疑問が起きる。沈黙は承諾を意味するのか、それとも拒絶を意味するのかという問題である。被申込者が沈黙している場合、当事者間の法律関係はどのように解決すればよいのだろうか。英国、米国、また日本をはじめとする各国の契約法は、一般原則として、沈黙を承諾とは認めていない。しかし、継続的な取引や取引の慣習によって、沈黙が承諾とみなされ、契約が成立することがあるので注意を要する（新堀聰『貿易売買』同文館出版、1990年、37-39ページ）。

数」にすでに死滅した、あるいは現在死滅しつつある言語を加えるべきであるかどうかという問題が上げられる。⁸

第1の理由である調査の不徹底という点であるが、文化人類学上の調査によってもアマゾン、パプアニューギニア、インドネシアなどの奥地にはいまだに調査の対象となっていない原住民が住む共同体が存在するといいい、彼らの言語体系の詳細は分かっていないという。第2の何をもって言語とするか明確な規程がないという点であるが、これは方言と言語の区別に見られる問題で、この二つの分類は純粋な言語的基準によるものよりも、政治的な基準で決定されることがよくある。たとえば、言語学的にはスカンジナビア語の方言とも考えられるスウェーデン語、デンマーク語、ノルウエー語の話し手たちは、かなりの程度の相互理解が可能であっても、お互いに異なる言語を話していると自覚している。一方、中国語の種々の方言の話し手は、筆談によらなければ理解しあえないのに、一般には同一言語の変種を話していると考えている。⁹第3の消え行く言語だが、ニューヨーク・タイムズ紙によれば、帝政ロシアによって1860年代にコーカサス地方からトルコへ移動させられた約5万人のウビク語 (Ubykh) の話し手たちのうち最後の話し手が1992年に88歳にして他界し、同語は途絶えてしまったという。同紙には同じような例が他にも報告されている。¹⁰また、21世紀末には、今6千種以上ある世界の言語の9割が消えるだろうという予測すらある。¹¹

7 『言語学大辞典』三省堂、1988年。

8 Ferraro, G. P., *The Cultural Dimensions of International Business* (2nd. ed.), NJ, Prentice Hall, Inc., 1994, p. 46.

9 『現代言語学辞典』dialectの項目。

10 Asahi Evening News, Life, January 10, 1999に転載。

11 「2020年からの警鐘」日本経済新聞、1997. 5. 17., 1ページ。同社「2020年」取材班によれば、この予測は、オーストラリア・アデレード大学のP. ムルホイズラー教授が同年4月に明らかにしたもので、消え去るのは主に少数民族の言語であるという。東京大学の角田太作教授も「情報化が言語の脅威。いまでもテレビの英語放送の影響で元々の自分の言葉を話せない人が増えている」と

いずれにしても、古代から貿易取引の相手方は言語の異なる他の1地域だけであったとは考えられない。複数の各々異なる言語を話す別々の地域を相手に取引を行っていたであろう古代商人たちにとって、その都度各々の言語に明るい通訳者を個別に雇う余裕もなかったであろうし、そうした通訳を探し出すのも至難の技であったろう。取引の都度、各々が異言語を話す相手方の言語を学ばなければならないとしたならば、これまた不合理なことである。また、いつの世も同じであるが、バーゲニング・パワー（交渉力）が対等ということはなく、取引においては売手と買手いずれかの強い方に言語選択権があるのがふつうであり、立場の弱い側としては相手に自分たちの言語を使って欲しいとは言えなかったであろう。

そのような事情が背景にあり、上記のうち「双方が理解できる第3国言語か混成語を使う」という第4の方法はかなり昔から行われていたことであろう。その際に使用される言語をリング・フランカと呼び、ふつう共通語とか（混成）通商語とか訳されている。14～15世紀にイタリア、スペイン、フランス、ギリシャ、アラブ諸国、そしてトルコの間で盛んに行われた地中海沿岸貿易に使用され、同語の語源となったリング・フランカがある。リング・フランカとは、イタリア語で「フランク族の言語」という意味で、この混成語の別名をサビール（Sabir）ともいった。フランク人とは当時近東・中近東で西欧人一般を指す呼び名であった。¹²

現代ではタンザニアやケニアなど一部の国々で公用語になっている東アフリカ諸国間で用いられているスワヒリ語や、アジアではインドネシア語がリング・フランカとして知られている。バンツール語の1種で、アラブ人の言語の影響が加わって形成された広域共通語であるスワヒリ語はアラブ商人とアフリカ現地人との交易言語で、8世紀ごろに生まれたものといわ

↘ 語った、と伝えている。

12 『現代言語学辞典』成美堂、lingua franca の項を参照。

れている。話者人口からいえばスワヒリ語人口の20数倍という大きな人口を抱える言語であるインドネシア語もまた、香辛料を多く産出していたムラヤ族(スマトラ島東部沿岸の一部族)の言語であるムラヤ語を起原とする通商語であり、7~8世紀ごろから広く島嶼貿易に用いられるようになったものである。以下に、貿易と共通言語という観点からそのインドネシア語の歴史を辿ってみよう。地中海とリング・フランカという関係をマラッカ海峡とインドネシア語という関係に対比させて考えると共通項が見出せる。その反対に、一方のリング・フランカが20世紀に入って消滅してしまったのに対し、もう一方のインドネシア語が人口2億、言語が2百から4百もあるという巨大な多民族国家をまとめあげる国語として憲法により制定され、現在もその使用者が拡大し続けているという事実は特記されるべきことである。¹³

インドネシア語は、言語学上からいえば、マレー語であり、マレー語は別名ムラヤ語とも呼ばれる。スマトラ島とマレー半島の間に横たわるマラッカ海峡は、古くから東西文化文明を結ぶ交通の要路として知られ、インド人、アラビア人、中国人、ヨーロッパ人、琉球人など様々の民族がやってきて交易を行い栄えていた。ちょうどヨーロッパにおける地中海的な存在であったともいえるだろう。そこでは、複雑な敬語表現がなく、意思疎通に便利なムラヤ語は、交易言語として諸民族に利用されて沿岸各地に広まっていったのである。近代に入り、オランダ人がこの地域に入ってきた時、ムラヤ語は、すでにこの地域の都市部とその周辺で頻繁に利用されていた。インドネシア語は、その出発点において、都市言語、民族を結ぶ言

13 同じ「共通交易言語」とはいえ、リング・フランカが、イタリア語・スペイン語・フランス語・ギリシャ語・アラビア語・トルコ語の混成語であったのに対し、ムラヤ語が、インドやアラビアの商人がマラッカ海峡を渡り到着したスマトラ島で覚え、商業語としてインドネシア各地に広めた一地方の土着言語であったという大きな違いを明記しておく必要があるが、この問題は別の機会に論じることとする。

語（リンク・ランゲージ）、そして階級格差を排した民主的な言語としての性格をもっていたのである。領域内に多様な言語を抱え込んだ宗主国オランダは、この言語に目をつけて、植民地支配に利用した。植民地政府は、オランダ語に次ぐ第2言語としてムラユ語をとりあげ、統治行政のなかでその使用を認めた。こうした過程のなかでムラユ語は、さらに複雑な意志伝達、概念伝達を行うことができる近代言語として変容していったのである。¹⁴このような背景のもとで、1928年にインドネシア青年会議が「青年の誓い」を採択し、その中でインドネシアの青年男女は、インドネシア語という統一言語を使用すると宣言し、独立後に制定された「1945年憲法」でインドネシア語を国語として正式に定めたのであった。

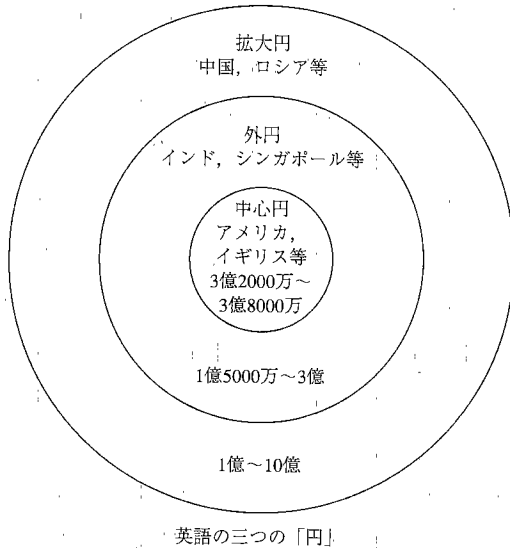
今日、世界でスワヒリ語やインドネシア語よりもはるかに大きな規模でリング・フランカとして用いられているのが英語である。次章以下で、世界各地で広域にわたって使用されている交易言語また国際通商語としての英語の過去・現在・未来の姿を概観していくことにする。

II 世界的通商言語としての英語

英語は今や世界のリング・フランカとしての地位を確保し、英語の使用者はますます増加するばかりである。世界人口の5分の1が何らかの形で英語を日々の生活に用いているともいわれるし、また一説によれば、英語を第一言語または第二言語とする国々の総人口は世界人口の3分の1になるとも言われている。

英語を母語とする話者人口は約3億8千万人であり、その他は英語を第二言語とするものか、あるいは英語を外国語として学ぶものである。英語

14 小川 忠『インドネシア・多民族国家の模索』岩波書店、1993年、20-21ページ。



の使用者をこのように(1)英語を第一言語として使う人々, (2)第二言語ないしは補助言語として使う人々, (3)外国語として学ぶ人々, と3種類に分類する方法は, 言語学の研究上では伝統的な手法である。その代表的なものがカチュルによる上の図にもある中心円 (インナー・サークル), 外円 (アウター・サークル), 拡大円 (エクспанディング・サークル) であり, クリスタルによって各々の使用者人口が加えられている。¹⁶

クリスタルによれば, 1995年時点で英語をその国の第一言語もしくは第二言語として使用している国はおよそ75ヶ国におよび, それらの国々

15 Kachru, B. B., Standards, codification and sociolinguistic realism: the English language in the outer circle, Quirk, R. & H. G. Widdowson (eds.), *English in the World: Teaching and Learning the Language and Literatures*, Cambridge, Cambridge University Press, 1985, pp. 11-30.

16 Crystal, D., *English as a global language*, Cambridge, Cambridge University Press, 1997, p. 54. [國弘正雄訳『地球語としての英語』みすず書房, 1999年, 76ページ]

の総人口は20億2千5百万人になり、世界人口の増加率を加味した場合1997年にその数は20億9千万人になるであろうといわれていた。¹⁷このうち母語ないしは母語並みの英語力をもつ者は6億7千万人で、「そこそこの習熟度」(reasonable competence) という尺度に従うならば18億人になり、その中間をとった12億から15億の間というのが英語話者人口の妥当な推定であろうとクリスタルは述べている。¹⁸なお、第一言語とは、ある人間にとり子供の頃に習得し、語句の使い方や文が正しいかどうか直観的に判断のつく言語のことで母語ともいわれる。第二言語とは第一言語の次に習得する言語であるが、国内あるいは地域内で共通語また公用語として日常生活において使用している言語である。わが国の場合のように学校教育の中で学ぶ英語は「外国語」であって第二言語とは呼ばない。

また、すでに1980年代の終わりに「世界中の科学者の3分の2は英語で論文を書き、郵便の4分の3は英語で書かれ、コンピューターに蓄積されている情報の80%は英語である（後略）」¹⁹といわれていた。インターネットに代表されるコンピューター・コミュニケーションの主要言語は英語であり、コンピューターを活用してグローバルな情報発信と情報収集をはかるならばインターネットの利用者は、その主要な使用言語である英語を習得しなければならなくなってきている。このように世界人口の5分の1から3分の1を占める人間が、言語としての正確度や運用能力は別にしても、英語を使ってコミュニケーションを行っているという事実は、英語が今や世界のリング・フランカになっているという証明になるであろう。

このように世界で広く使用されるようになってきた英語を EIL (English as an International Language) ²⁰ といったり、国際ビジネス英語を IBL (Inter-

17 *Ibid.*, p. 60. 同書, 85 ページ。

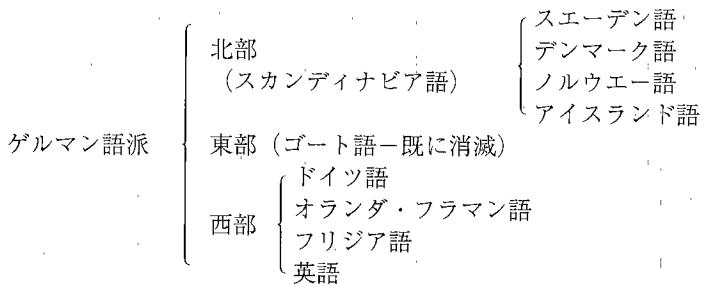
18 *Ibid.*, p. 61. 同書, 85 ページ。

19 Crystal, D., *The English Language*, Harmondsworth, Penguin, 1988, p. 358.

20 Pennycook, A., *The Cultural Politics of English as an International English*, New ↗

national Business Language) と名付けたりする。これは、たとえばノルウェー人がベルギーで、イタリア人とビジネスのためにコミュニケーションを行う場合に用いる英語であり、英語を母語としない人々の間で使用される唯一の共通語をいい、それによっていかなるコミュニケーションも可能になるものをいう。その文法や文体構造は、各々の母語の影響を色濃く受けるものであるとされる。²¹

このように現代では広域にわたって使用されるようになった英語の詳しい歴史は専門書の説明に譲るとして、次に言語体系の中における英語の位置付けについて概観することにし、次いで国際語としての英語の歩みについて述べることにする。英語はインド・ヨーロッパ語の一つである。このインド・ヨーロッパ語族は、ヨーロッパの多くの言語やインドの諸言語やベルシャまた隣接する地域の言語などの多くを含む大きな言語ファミリーである。インド・ヨーロッパ語族は8つの語派に分けられるが、その一つがゲルマン語派 (Germanic) で、英語はこのゲルマン語派に属している。そのゲルマン語派は次の諸言語から成っている。



また、英語のおおまかな時代区分は次のとおりである。

↘ York, Longman Publishing, 1994, p. 6.

21 Fenner, A., *Lingua Anglica: The Emergence of International Business English*, *Language International* 2: 1, 1990; reproduced in *The Oxford Companion to the English Language*, London, Longman UK Ltd., 1992.

- (1) 古英語 Old English (OE) 450–1100
アングロ・サクソンのブリテン島侵入からノルマン人の来寇まで
- (2) 中英語 Middle English (ME) 1100–1450
ノルマン人の英国征服からルネッサンス以前の英語
- (3) 近代英語 Modern English (ModE) 1450–
ルネッサンス以降の英語

上記の時代区分をさらに細かく、古英語と近代英語を各々2期に分ける場合もある。また、上記の時代区分に初期近代英語 (Early Modern English, Emode) を加えて4分割する場合もあり、その場合は初期近代英語が1450–1700年、近代英語が1700年以降となる。²²最近では、次のように7分類する場合もある。²³

- (1) 前英語期 (～紀元450年頃)
- (2) 古英語初期 (450年頃～850年頃)
- (3) 古英語後期 (850年頃～1100年頃)
- (4) 中英語 (1100年頃)
- (5) 近代英語初期 (1450年頃～1750年頃)
- (6) 近代英語 (1750年頃～1950年頃)
- (7) 近代英語後期 (1950年頃以降)

国際語としての英語の歴史は16世紀の終わり頃に始まると言われてお

22 藤井健夫「英語の歴史 (英語のあゆみ)」藤井健夫・大島新共編『ことばの世界—英語学入門』大坂教育図書, 1997年, 第9章, 228–229ページ。Perrin, P. G., *Writer's Guide and Index to English* (Rev. ed.), Chicago, Scott, Foresman & Co., 1950, pp. 542–548.

23 Graddol, D., *The Future of English?*, London, British Council, 1997, p. 6–7. [山岸勝栄訳『英語の未来』研究社出版, 1999年, 22–23ページ]

り、上記の時代区分に従えば初期近代英語の時代に始まったといえる。その当時、世界中で英語を話す者の総計は500万人から700万人で、そのほとんどが英国諸島 (the British Isles) に住んでいたと言われる²⁴。しかし、当時の貿易商人たちは、遠く西アフリカや中国南岸から東岸まで航海し、船員たちとともに行く先々で交易言語としての英語を広めていった。当時そうした船員たちと現地人との間で使われた英語をピジン・イングリッシュ (Pidgin English) というが、「ピジン」は当時の中国人商人たちが英語の *business* を発音したおりの中国訛りであるとする説もある。貿易商人たちは英国から安い綿織物や細々としたものを西アフリカへ運び、それらを黒人奴隷に換え、その黒人奴隷をカリブ海諸島に運び砂糖農場に売り、その代金で砂糖、ラム酒、や糖蜜を持ち帰り莫大な利益をあげていた。この一連の往復航海は英国で奴隷制度が禁止された1807年まで150年間にわたって続けられた。この3点 (英国のプリストル、西アフリカの奴隷海岸、そして西インド諸島) を結ぶ交易を「大西洋トライアングル (Atlantic Triangle)」と呼び、奴隷となった黒人たちがお互いの間、そして乗船している船員たちとの間のコミュニケーションに用いた英語が黒人英語 (Black English) の始まりであった。この種の船に乗っていた身分の低い船員たちの話す英語はピジン・イングリッシュであったという²⁵。

英国の植民地拡大にともなって輸出を中心とする貿易はさらに栄えるようになり、とくにアメリカ植民地建設の時代にはさらに大きく世界へと広がっていった。19世紀に入ると、大英帝国は貿易政策と文化政策を独自の手法で結びつけ、世界における英語の地位を強化した。その後、英国の輸出の増加は目覚ましく、19世紀中ごろには全世界の輸出の4分の3か

24 Crystal, *op. cit.*, p. 25.

25 Macrum, R., Cran, W., & MacNeil, R., *The Story of English* (new rev. ed.), London, Faber and Faber Ltd. & BBC Books, 1986, pp. 210-215.

ら3分の1のシェアにまで伸長した。英国の優位は貿易面だけではなく、19世紀後半、英国は世界の商船の過半数を有して世界の海運業を支配したし、国際金融の面でもロンドンは世界の金融の中心地としての地位を築いた。

英国の貿易商人や船員たちが英国から世界中の植民地へと運んだ英語は多くの言語と接触していく過程で「雑多な言語」となっていく。英語は、いろいろな言語からの借用語も多い。たとえば、海上保険用語である「海損」を意味するアベレッジ (average) はアラビア語で損傷を被った商品 (damaged merchandise) を意味し、その損害を所有者が平均して分担したことから「損失・損害商品の分担」を意味するようになったものであるが、その後「平均」という一般的な意味の方が多用されるようになった²⁶。このように英語は、初期にはケルト語やラテン語から、その後スカンジナビア語やノルマン・フランス語から、また英領植民地からもいろいろな言葉に移入してきたのである。

20世紀における英語の歴史は、経済的に英国に代わり超大国となった米国の発展を抜きにしては語れない。米国は、その強大な軍事力、工業力、科学技術力、経済力を武器にして、経済・科学技術・文化の諸分野で世界の国々への影響力を強めただけでなく、英語を世界にさらに普及する役割をも担うことになった。

英語が国際語となった理由は次のようにまとめることができるだろう。

1. 英国の貿易政策と文化政策
2. 超大国としての米国の興隆
3. 英語自体の柔軟性と混種性

26 『英語語源小辞典』研究社出版、average の項参照。

英語は英国による植民地拡大政策の結果として貿易のための商用語として世界に広がっていき、各地に散在する植民地での公用語となり、植民地が独立した後もその有益性から、現地において異なる言語を話す異民族を結ぶリンク・ランゲージ（つなぎ言語）として使用されるようになった。また、学術論文や文学など出版物の数においては、英語によるものが圧倒的に多く、世界の他の言語によるものを凌駕し、英国にとっては、こうした出版ビジネスは、英国内外で展開する英語教育産業とともに「英語の輸出」として外貨獲得の花形輸出産業となっている。²⁷

20世紀に入ってからの米国の経済、科学技術、政治や文化の発展は誰もが認めるところであるが、その結果として今世紀に入って設立された世界大的な政治また経済国際機関の多くが米国にその拠点を置いている。また、第二次世界大戦後の混乱期にあつて経済的に豊かであった米国は世界の国々から留学生を大規模に受け入れてきたが、留学を終え帰国した彼ら留学生たちは国内での教育、また政治や経済の世界での活躍を通して米国で習得した英語を世界に広める役割をも果たすことになった。

英語はドイツ語やフランス語など他の欧米言語に比べて、統語法からいって単純な屈折、活用と語尾変化にその特徴があるといえる。また、名詞形のジェンダー（性）は自然なものが多く、複雑な名詞の性別を憶えなければならない他の言語に比べ外国語としての学習を容易なものにしている。英語はまた、初期の時代から今日に至るまで他の多くの言語から自由に借用をくり返してきたが、そのような柔軟性と混種性も英語が国際語となりえた要因の一つとであるとの分析もあるという。²⁸

最後に、なぜ英語のような共通語としての国際語が必要とされるのかその理由を考えてみたい。経済的な観点からまず上げられるのが翻訳コスト

27 Graddol, *op. cit.*, p. 9. [山岸, 前訳書, 27-28 ページ]

28 *Ibid.*, p. 6, 同書 21 ページ。

の問題である。EU や国連における膨大な翻訳コストについてはよく語られるところであるが、一般企業においても、国際ビジネスに用いられる言語が各々ばらばらで、それらをすべて相手国語また母（国）語に翻訳しなければならないとしたら、その手間ひまもコストは大きなものになることは容易に想像できる。また、次の理由もコストに負けず劣らずに重要なものである。それは、通訳や翻訳の難しさから来る誤解の問題である。日露戦争終結後の1905年に両国の間で締結されたポーツマス条約は英語と仏語でその原案が作成されたが、原案では英語の *control* と仏語の *contrôler* を同意語として扱っていた。ところが実際は、英語では同語は「支配する（to dominate or hold power）」という意味を表す一方、仏語では単純に「調べる（inspect）」という意味であり、その結果同条約の締結も危うく反古になるところであったという事例が報告されている²⁹。その他この種の問題はよく起きるし、それが原因となって2国間の政治問題になることもある。共通語を使うからといって誤訳や誤解の問題がなくなるとはいえないが、問題を少なくすることは可能であろう。次章では、共通語としての英語が貿易や企業の内外でどのように使用されているのかその実態を探ることにする。

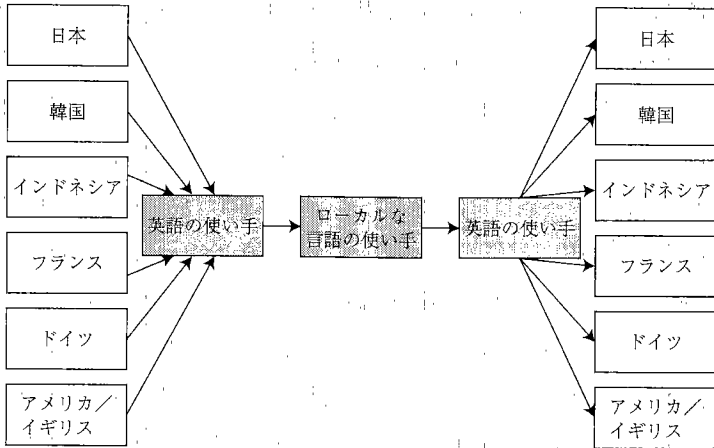
III 貿易における英語使用の実態

貿易取引においては、主に英語がリング・フランカとして用いられてきたが、伝統的な貿易取引におけるその役割を表したのが次の図である。左側が輸出を、右側が輸入を示す³⁰。

グラッドルによれば、伝統的な貿易取引が関係するものは次のようなも

29 Bryson, B., *The mother tongue: English and how it got that way*, New York, William Morrow & Co., Inc., 1990, p. 188.

30 Graddol, *op. cit.*, p. 33 [山岸, 前訳書, 92 ページ]



のである、という。

1. 商品の物理的移動,
2. 海外の相手すべてと英語で行われるやりとり,
3. 英語力をそなえた重要な仲介役 (交渉人・通訳),
4. 現地語で行われる製造や取引,
5. 労働コストに基づいた労働者の配置,
6. 遠隔地での活動を管理・監視するために活用される通信技術。

貿易に関係する業務といえば、海上・航空運送、海上保険、銀行などが主なものだが、その業務遂行上で使用される F.O.B., C.I.F., B/L, また L/C などの略語を含みトレード・タームズと呼ばれる貿易用語は現在ではほとんどのものが英語であると言っても過言ではない。貿易取引の世界的な取引条件として知られ、国際商業会議所が規程するインコタームズ (Incoterms と略称されるが、正式の名称は a set of international rules of the interpretation of trade terms) の EXW (Ex Works) に始まり DDP (Delivered Duty Paid)

に終わる 13 種類の各種タームズもすべて英語表記の略語であり、仏語の略語ではないし、信用状統一規則も英語版が先にできてその後には仏語の翻訳版が用意される³¹。

海上保険も、その歴史はフェニキア人の太古までさかのぼることも可能だが、「海上保険」という語句がはじめて使用されたのは 1310 年であるといわれる。その後英国で最初に書かれた保険証券はイタリア語であったものの、15 世紀から 17 世紀にかけて英国を中心にした国際的な貿易が大きく発展していくに従い、ロンドンが海上保険の中心地となり、海上保険証券の約款も海上保険の用語もすべて英語化されて今日に至っている³²。我が国で使用されている英文貨物海上保険証券は、国際貿易に伴う流通性を高めるため、その基本書式は 1906 年の英国海上保険法（Marine Insurance Act, 1906）の第一付則に掲載されているロイズ S. G. 保険証券（Lloyd's S. G. Form）に基づいていて、その証券面には、保険契約に基づく責任につき英法による旨の “This insurance is understood and agreed to be subject to English law and usage as to liability for and settlement of any and all claims.”（本保険は一切の填補請求に対する責任およびその決済につき英国の法律および慣習によるものと了解し、かつ、約束する）という英法準拠約款が記載されている。こうした傾向は、ひとり我が国で使用されている保険証券のみならず、世界各国の海上保険証券にも広く見られる³³。

今世紀になり、世界貿易が飛躍的に拡大したのは、これまでの単なる企

31 パリの国際商業会議所が発行している Incoterms 1990 の裏表紙には English (original text) / French (translation) とあるが、国際商業会議所へ問い合わせた回答では、Incoterms は英語と仏語の 2 カ国語版で作成され、同所発行の 1993 年信用状統一規則（ICC Uniform Customs And Practice For Documentary Credits, Publication No. 500＝略称 UCP 500）は英語版が先に作成され、後に仏語に翻訳されるという。anne-lise.dudot@iccwbo.org 1999 年 10 月 18 日の返信による。

32 Rosenthal, M. S., *Techniques of International Trade*, Tokyo, Kogakusha Co., Ltd., 1950, p. 220.

33 新堀, 前掲書, 234-235 ページ。

業どうしの取引によるものだけではない。企業内貿易がますます国際間取引の主流ともいえるような時代を迎えている。このことは、従来にはみられなかったほどに企業内において異文化のヒトとヒトとの接点が増加していることを意味している。従来のような物品の国際間の売買に過ぎない貿易活動においては、その異文化間のヒトの接点は貿易取引の一方の極である企業の担当者ともう一方の極に位置する相手企業の担当者に限られていた。しかし、企業内貿易が著しく増加してきているということは、ビジネスマン(技術者そして購買担当者を含む)が異文化の人々と接する場が総合的にみて量的に著しく拡大してきていることを意味する。

いわゆる従来の貿易活動においては、前に紹介したグラッドルの輸出入の図にあるように、その売買の対象となった製品の企画・開発・設計から生産、そして輸出港までの物流のすべてにおいて同一国において行われ、そこでのヒトの接点には異文化現象は存在せず、言語も現地語が用いられていた。輸入地における物流についても同じことがいえる。

それが、現代のように企業内貿易が活発になってくると、各部品の設計から、その組み立て、あるいは下請け業者への発注、その購買、完成品の生産からその輸出入と国内物流だけではなく、技術情報の交換や指示などが同一企業内に働く多くの、文化や言語を異にする人々の間で行われるようになる。そしてそのようなやりとりのすべてをまかなうコミュニケーションの用具として「社内共通語」が必要とされるようになった。

社内共通語が必要とされる理由は、異なる国籍や文化背景を持つ人々の間のコミュニケーションをスムーズに行うためであるが、これには二つの場面が想定される。一つは、欧州の企業などによく見られるケースだが、同じ職場の中に国籍が違う社員が共存している場合。他の一つは、シンガポールや、さらにはアフリカ諸国に多く見られるケースだが、1国内の進出企業に働く従業員が同じ国籍を持ちながら、文化と言語を異にする複数

の民族から構成されている場合である。例えばシンガポールの場合では、国語はマレー語だが、実際には公用語である英語、中国語、タミール語、マレー語の話者たちが混在し、企業内の主要言語は英語と中国語（華語）の二つである場合が多い。ナイジェリアでは同じ職場にハウサ語、ヨルバ語、イボ語の話し手たちが一つになって働いているが、それら異なる言語話者たちを結ぶ「つなぎ言語」は英語である。

その社内共通語であるが、それは必ずしも本社所在国の言語や子会社所在地の言語が最適であるとはいえない。「マレーシアの場合には、公用語であるマレー語をマスターし話せればいい、とは必ずしもいえない。マレー語を話せばマレー人は喜び、よいコミュニケーションがとれることは請け合いである。しかし、中国系やタミール系にしてみれば、異民族とだけ仲良くしている人物という印象をもつことになりやすい。複数の異民族がそれぞれに強いアイデンティティーをもって存在している時には、そのどれとも関わらない言葉でコミュニケーションすることが、もっとも公平でよい印象を与えうる場合がある。実際マレーシアの場合には、旧宗主国の『イギリス語』がその役割を果たしている³⁴』という。実際にマレーシアへ進出している日系企業にあっては、このマレー系、中国系、インド系の3民族の取り扱いに苦勞しているところは多いようである。グローバル企業の社内共通語として第3言語である英語の果たす役割はこのようなところにもあるという好例であろう。

ここに ASEAN 5 カ国に所在する日系企業 183 社から有効回答を得たという『ASEAN における日本企業の子会社経営と人的資源管理のあり方』

34 今田高俊・園田茂人編『アジアからの視線』東京大学出版会、1995年、88ページ。

35 一例を上げれば、従業員数370人を抱える Teknicast Sdn Bhd という日系企業の従業員構成比率は、バングラディッシュ人34%、マレー系30%、インド系28%、中国系7%、日本人1%となっている。「ジェットロセンサー」誌、日本貿易振興会、1999年4月号、48ページ。

表 3-15 日常の業務指示での使用言語 (複数回答, 所在国別)
(%)

	現地国語	日本語	英語
シンガポール	4.4	0.0	100.0
タイ	61.2	14.3	85.7
マレーシア	21.2	9.1	100.0
インドネシア	78.9	7.9	63.2
フィリピン	16.7	0.0	100.0
合計	39.3	7.1	88.5

(注) シンガポールの公用語は英語の他にマレーシア語・中国語・タミール語がある (国語はマレー語)。

表 3-16 管理職以上の会議での使用言語 (複数回答, 所在国別)
(%)

	現地国語	日本語	英語
シンガポール	2.2	22.2	91.1
タイ	34.7	16.3	81.6
マレーシア	3.0	12.1	90.9
インドネシア	52.6	10.5	68.4
フィリピン	11.1	5.6	100.0
合計	22.4	14.8	84.7

という調査結果があるが、調査項目 4 の(3)社内公用語に「日常の業務指示での使用言語」と「管理職以上の会議での使用言語」をまとめた表 (表 3-15, 同 3-16) があるので紹介したい。³⁶

これらの表からも明らかなように、ASEAN における日系企業においても英語は社内公用語として広く用いられている。また、これは何も日系企業だけではなく、欧州の多国籍企業やドイツの大手企業の多くにおいても同じように英語が社内公用語として定着しつつある。それらの状況に関しては、すでにこれまでいくつかの論文の中で事例を紹介し、詳しく述べて

36 『ASEAN における日本企業の子会社経営と人的資源管理のあり方』 社団法人日本在外企業協会, 1993年, 43-44 ページ。

きたので本稿では省略することにした。

IV 国際英語の拡大と様々な英語

英語がこのように世界で広く用いられるようになってくると、かつてラテン語がローマ帝国の衰退とともに数百年の間にお互いに理解不能なフランス語、スペイン語やイタリア語などに分派していった事実を引き合いに出し、これから数世紀の間に英語も各々異なる別の言語に分化していくであろうと予測する説も根強い³⁷。しかし、同じ広域使用言語であったラテン語と今日の国際英語の場合には違いが存在する。前者の場合は、同一言語を話していた者たち(ラテン語の話者)がいろいろな理由から別々の言語話者に分化していったという状態であったのに対し、英語の場合には各々別の言語を話していた人々がその簡便性から、母語以外の対外的使用語として一つの新しい共通語を学習していくという状態にあるといえる。

確かに米国や英国など英語を母語とする国の人々からみれば、自分たちの使用する英語とは異質な新しい様々な英語が生まれてくることに対する抵抗感はあるだろうし、その話者の総人口が母語話者人口をはるかに上回るような状況においてはなおさらのことであろう。また、逆に我が国をはじめとする英語を母語としない国々にあつては、最近英語がこのように広く用いられている実態をとらえて、このままでは英語を母語とする国々による文化的・経済的支配が進むことになると主張する「英語帝国主義論」も盛んである。しかし、英米からの抵抗も非英米諸国に横行する「英語帝国主義論」も、大事な点を忘れてるように思える。それは、今日の国際英語は、もはや英国や米国の英語ではなく、それぞれ独自のアイデンティティをもち英国や米国の支配などには関係のない「自分たちの言語」とし

37 McCrum, R. *et al.*, *op. cit.*, pp. 338-339.

での国際英語であるという点である。まさに、「実際、英語を第二言語とする国民は、自らの価値やアイデンティティの表現を、自らの知的財産の創出を、商品とサービスの輸出を、彼らなりの英語を通じて行っているのである³⁸」というような時代を迎えているのである。

今から100年ほど前の我が国においては日本語という規程がよりゆるいものと感じられたであろう、という説がある。「当時であれば、『日本語』は単数ではなく『日本語諸語』と複数表現にしても、さして異常とは感じられなかったかもしれない」というのである³⁹。実際に、長崎の出島にはオランダ語の通事(幕府の通訳官)の他に各地の日本語を通訳する専門の通事がいたともいわれている。かつての日本には「様々な日本語」が存在していたのである。

英語の場合はどうであろうか。推定によれば、現在では全土の80%近い地域に住む米国総人口のほぼ3分の2が同じアクセント(ここでは「なまり」という意味)で英語を話し、顕著な同一性を示しているという。しかし、かつては米国人の言語形態にはかなり大きな多様性が存在したという説があり、マーク・トウエインが小説『ハックルベリー・フィン』の登場人物を描写するために、ほぼ同一の地域出身者であるにもかかわらず、7つもの異なる方言を必要としたという事実をその証拠にあげている⁴⁰。今日では米語は、北部、中部(北中部と南中部に再分割する場合もある)、南部、そして東部(ニューイングランド)の4方言に分けられ、主に発音、語彙、文法などの違いにその特徴がみられる。英国には地域の特徴を表す方言がさらに多く存在し、一説では、スコットランドに9つ、アイルランドに3つ、そしてイングランドとウエールズには30もの方言が存在

38 Graddol, D., *op. cit.*, p. 3. [山岸, 前訳書, 13ページ]

39 田中克彦『言語からみた民族と国家』岩波書店, 1991年, 33ページ。

40 Bryson, B., *op. cit.*, p. 100.

するとまでいわれる。⁴¹

このように地域の違いによって生じる方言を地域の変種 (regional variety) と呼んでいるが、英語にはイギリス英語とアメリカ英語の2つの代表的変種がある。しかし、英語の使用状況を世界的にみれば、そこにはまさに様々な英語 (varieties of English, or New Englishes) が存在していることが分かる。世界の地域の変種は主に英語圏を中心とした母語変種と、英語を第2言語とする国々で認められる非母語変種から成りたっているが、近年、後者が次第にその地域の文化・伝統・価値観に基づいた英語へと変質しつつあるといわれている。⁴² より一般的には、母語変種を標準英語 (Standard English) と呼び、非母語変種を非標準英語 (Nonstandard English) と呼んでいる。前者は「教養ある英語母語話者が書いたり話したりするとき用いる英語の変種である」とされ、英国、ウエールズ、スコットランド、北アイルランド、アイルランド共和国、オーストラリア、ニュージーランド、南アフリカで使用されているイギリス英語 (British English) と米国とカナダで用いられている北米英語 (North American English) とに2大別され、後者は各々アメリカ英語変種、カナダ英語変種と分類されるのがふつうである。それ以外の英語はすべて非標準英語 (Nonstandard English) と総称している。⁴³

非母語変種について語るときに問題となるのが、その話者の言語能力と使用される英語の質である。厳しい言い方をすれば、「あるヒトが英語を話しているのか、英語らしいがまったく別の言語を話しているのか」という問題である。⁴⁴ 「英語を話せる、書ける」というレベルをどこにおくかに

41 Bryson, B., *op. cit.*, p. 109.

42 木下英文「社会の中の英語」藤井健夫・大島新共編『ことばの世界—英語学入門』大坂教育図書、第8章、210-215ページ。

43 Trudgill, P. & Hana, J., *International English: A Guide to Varieties of Standard English*. London, Arnold Publishers Ltd., 1985. p. 1. [寺澤芳雄・梅田 巖訳「国際英語」研究社出版、1986年、1ページ]

よって前述した世界の英語話者人口も大きく変わってしまう。Haus kuku (=house cook), haus siku (=house sick), glas bilong lukluk (=glass belong look-look), man bilong long-way ples (=man belong long way place) がそれぞれ「台所」, 「病院」, 「鏡」, 「外国人」を表すパプア・ニューギニアのトクピシン語を英語とみなし、その話者を「英語話者」とするのか、しないのか。⁴⁵もし、しないとすれば、中国語やマレー語に影響を受け、かつ語彙レベルでもそれらの単語や表現がふんだんに混ざるシンガポール英語 (Singlish) や、アフリカ諸国に多く見られるピジン英語などいわゆる非母語変種あるいは非標準英語はどのようにあつかえばよいのか、という問題は解決しにくいものである。非標準英語による様々な英語は、多様性に富んでいて、一概には述べ難いが、英米の標準英語とは異なる次のような傾向がみられる。⁴⁶

- 1 単数・複数の観念が希薄で単数形のみで通す傾向にある。また、数えられる名詞と数えられない名詞の区別がない。
- 2 不定冠詞 a・an は用いず、特定のものを指すときに one か the か指示詞 (this, that の類) を使う。
- 3 時制の区別はなく、「昨日」「去年」など副詞を付ければ十分わかるから過去も現在形で表す。3人称単数現在であっても語尾に s・es を付けない。
- 4 疑問文で始まる疑問文において主語と動詞の倒置が行われないから、What time he come? (彼はいつ来るの) や Your wife don't come?! (奥

44 Bryson, B., *op. cit.*, p. 180.

45 小林素文『複合民族社会と言語問題』大修館書店, 1989年, 56ページ。

46 橋内 武「英米語から国際英語へ」朝日新聞, 1989年6月12日, 7ページ; に掲げられている10点の中から私自身が収集した見本に合う5点にしほり紹介する。

さんは来なかったのか」という問いが発せられる。また、付加疑問は単純で主語の人称・数、動詞の時制に関わらず isn't it? の一本槍である。

5 いわゆる yes/no 疑問文に対する答え方は、日本語式であり次のようになる。

Q: You have no objection? (さしつかえありませんね)

A: Yes. I have no objection. (はい、ありません)

このように「様々な英語」は、標準英語とはかなり異なっているが、日本式の英語と共有するところも多く興味を引かれるところである。

今や世界各地で各々の民族語の影響を受けた非標準英語と称される上記のような英語が大手をふるって使用されはじめられているのは事実であり、このうねりを誰も止めることはできない状況である。これらの英語は、米国や英国などの特定英語国の文化的背景などとは無関係な、自国の文化や言語と結びつき独自の形で発達していく様々な英語であるが、一つの言語が異なる言語に分派していったラテン語と同じようにならないためには、今から二つの方向を思考しておかなければならない。

まず、各種の異民族がひとつの地域的広がりの中に共存しているような国の中で英語が各民族間のリンク・ランゲージとして使用されはじめ、それが今や第2言語となっている地域を考えてみよう。この場合には、その国特有の英語として発達していき、何世紀もの長い間には英米の母語変種からはかなりかけはなれた異質の英語となっていくかもしれない。

ただし、この可能性を一方の極とした場合に、もう一方の極には前に分類した(1)英語を第一言語として使う人々、(2)第二言語ないしは補助言語として使う人々、(3)外国語として学ぶ人々、のグループ間で第3グループの話者たちが第2グループに、そして第2グループの話者たちが第1グループに移動していく可能性もありえる。つまり、英語が決して上手ではなか

った親の代、そこそこに使えるようになった子の代、そして英語を流暢にあやつる孫の代と、親から孫への3代で第3グループから第1グループに近い存在に変化していくだろうという考え方である。

お互いに理解が困難であった日本語が現在では、方言は残るものの、一つの国語となりえたのは映画、ラジオ、テレビなどの普及と発達によるところが大きいと思うが、英語の場合にも同じことが言えよう。これは、近年数多くのヒット作品を生み出している米国製映画、英国のBBCラジオ放送、そして米国のCNNやABCなどの人気報道テレビ番組などの世界的進出とその影響力を考えれば容易に想像がつく。それらの影響から最近では英語を第2言語としている国々の若い世代の英語力が、両親のそれに比べ比較にならないほど流暢なものになっている。ある日本人ビジネスマンの次の言葉は傾聴に値する。「東南アジア経済は、創設期を過ぎ、安定期を迎えつつありますが、それに伴い経営者層も1代目から、西欧に留学していた2代目に世代交代が進みつつあり、当然ながら彼らは英語が堪能です。従って大きく分けると経営判断が伴う業種は英語が通用しますが、作業員を管理する職種には、現地語が主流になります」。

次に、国際間で使用される共通語としての役割を考えなければならぬ。各国、各地域に特有なローカル色の強い英語がその地域や国内で発達していくようなことがあったとしても、そのような英語はあくまでもその国内での使用に限定されるべきである。その反面において国際ビジネスや文化・政治・経済の交流の場では、それぞれ独自の文化や言語の影響を受けてはいても、お互いの意思疎通が可能な共通語としてのより質の高い国際英語が使用されていくことになるであろう。

「様々な英語」に求められるのは、この「世界におけるリングフランカ」としての役割である。ますますせまくなる地球上で、異なる文化的背景をもった人々どうしがスムーズなコミュニケーションを行うための「共通

語」として、英米語の足かせから自由になった英語は、国際語として今後とも大きな役割を果たしていくに違いない。

おわりに

本稿では、貿易取引における言語の役割をその歴史から概観し、そこにはいつの時代にも交易言語あるいは通商語と呼ばれる共通言語が存在したことを明らかにし、今日ではその国際共通語は英語であることを様々な事例を上げて実証した。冒頭に述べたようにいかなるビジネスも言語がなければ成立しないことは明らかであり、取引が行われる際にはどのような言語活動、言い換えればどのようなコミュニケーション活動が行われてきたのか、そしてなぜそのようになったのかという問題を考えてきた。次いで、貿易と呼ばれる国際取引における言語またコミュニケーションの重要性、商用共通言語としての英語が必要とされる理由を考察し、そこで用いられる様々な英語の実際や問題点を探ってみた。

終章では、ますます小さくなるこの地球村の中で各々文化や慣習を異にする世界の人々が国際英語という共通語を用いることによって遭遇するであろう言語事情を、様々な英語の生成と今後の発展という面から考察した。今後とも国際取引に用いられていくであろうこれからの国際英語は、一方で各自の文化に染められた独自の言語となっていくようである。しかし、各民族は、その内部におけるビジネス・コミュニケーションには独自性の濃いローカル色豊かな英語を使用していきながらも、その反面でお互いの共通理解を高めていくために、一方では相互理解が可能な共通言語としての英語の役割を意識しなければならないはずである。英米の英語とはたとえ異なっても、真の共通語として何らかの統一されたルールに従った国際英語の確立も求められてしかるべきであると思う。